

「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」放送原稿〈5月16日（金）放送分〉

テーマ「奄美の歴史①」

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様、おはようございます。鹿児島県立奄美図書館です。今日は、「奄美の歴史」シリーズの第1回目です。

「奄美」の歴史は、おおよそ5つの時代に分けることができます。まず、「奄美世（アマヌ）」と呼ばれる時代で奈良・平安時代初期ぐらいまでです。次に、「按司世（アジヨ）」と呼ばれる時代で、平安・鎌倉・室町時代までです。勢力をもった人たちが現れ、大島を支配していました。次は、「那覇世（ナハンユ）」です。琉球王 朝統治時代ともいわれ、戦国・安土桃山時代までです。この頃は、沖縄の王族の支配を受けていました。そして、「大和世（ヤマトユ）」と呼ばれる時代。藩政時代ともいわれ、江戸時代までです。薩摩藩、島津氏の支配を受けました。そして、約140年ぐらい前に、日本は明治維新を経て、近代社会そして、現代へと変わってきたのです。

それでは、奄美世（アマヌ）以前の時代はどうなっていたのか。まず、その頃のことからお話ししていきましょう。最も古い時代と言われている「旧石器時代」は、自然環境の厳しい時代ですが、笠利町にある「土盛喜子川遺跡」は、約2万5000年前の遺跡です。このことから少なくとも2万5000年前には奄美に人が住んでいたことが分かりますね。また、国の特別天然記念物に指定されている「アマミノクロウサギ」は「生きた化石」とも言われていますが、縄文時代はもちろん、人間が暮らすずっと以前からいた動物です。縄文時代後期になると、九州からの土器も入り、石皿などの石器も増えてきます。複数の竪穴住居跡も確認されています。利用できる資源が少ない「島」では、石器づくりさえ簡単ではありません。このようなことから、奄美の島々では、早い段階から島同士の交易が発達していたと考えられます。島の違いが海や交易の重要性・必要性をさらに高めたのでしょう。

次に、奄美世（アマヌ）の時代についてお話しします。アマヌは、家族や親戚等が共に生活していた社会です。古代の集落をマキョといいますので、マキョ共同体時代ともいいます。マキョの中心となる家を、ウヘヤーあるいはフーヤといいます。この家の男子（エヘリ）が村のまとめ役となり、女子の一人（オナリ）が集落の祭りをつかさどってエヘリの仕事をバックアップしていました。このオナリが、後のノロ制度へとつながっていきます。この時代は、邪馬台国の卑弥呼と似ていますね。この時代、奄美のことを記録した本がないので、細かい様子は分かりませんが、日本書紀という本に初めて「あまみ」が

出てくるのは657年。教科書では、中大兄皇子^{なかのおおえのおうじ}が大化の改新をしたころです。このことから「あまみ」という言葉は、約1350年の歴史があることになります。また、7世紀には大和朝廷^{やまとちやうてい}と交易などのつながりがありました。この時代の代表的な遺跡^{いせき}である「小湊フワガネク遺跡群」^{こみなと いせきぐん}では、大量のヤコウガイ貝殻が発見されました。ヤコウガイは、大きさ20cmほど、重さは2kgにもなる大型の巻き貝です。貝殻は、分厚く^{しんじゆしつ}真珠質のため、磨くと美しい光沢^{こうたく}を発します。昔から工芸の材料として利用されていました。この時代のヤコウガイがどのような使われ方をしたのかははっきりしない面もありますが、後の平安時代や鎌倉時代には平安京や鎌倉などで大変な貴重品^{あつかい}として扱われていました。

また、「海」を利用して、島の外に目を向け、活躍していた人たちもいました。遣唐使船^{けんとうしせん}には、「奄美訳語」^{やくご}という奄美の言葉を理解する通訳^{つうやく}がのっていたこともありました。通訳がいたとは、都^{みやこ}と奄美の言葉はどれだけ違っていたのでしょうかね。

長く続いた奄美世（アマンユ）でしたが、「外」からの鉄の文化による生産力の発展や、交易の利益等によって、勢力を強めた人々が周辺地域を支配下に治めるようになりました。このように勢力を伸ばした人を按司（あじ）^{あ じ}とといいます。この時代を按司世（アジユ）^{しだい}とといいます。最初は、地域を治めていた按司ですが、次第に、貿易商人のような立場になります。「海」がさらに重視されました。奄美の珊瑚礁^{さんごしやう}は、当時の重要な貿易品であるヤコウガイの宝庫でした。工芸品の材料として大事にされてきたこの貝を輸出して、代わりに九州や大陸から鉄を輸入して島の生産力をさらに前進させたのです。聖徳太子が活躍していた頃には、ヤコウガイは日本に運び込まれていたといわれています。有名な清少納言の「枕草子」にも、「屋久貝」^{や く がい}という呼び名で、酒のさかづきとして利用されていた記述^{きじゆつ}があります。この貿易により力を伸ばした按司^{あ じ}ですが、奄美大島の全体の王になることはありませんでした。それは2つの理由が考えられます。一つは、大島が山や岬^{みさき}で区切られ、集落ごとに孤立^{こりつ}している地形だったということです。二つめは、土地の生産性が低いため、農業よりも貿易の方が大事であり、大島全体を統一する必要がなかったということです。こうして奄美には統一政権といったものはできませんでしたが、統一政権は「海」の向こうからやってくることになります。次の時代の那覇世^{ナ ハンユ}です。この時代については、次回お伝えしていきます。

県立奄美図書館にも奄美の歴史に関する本がたくさんあります。ぜひご覧ください。

職員一同、皆様のご来館を心からお待ちしております。以上、鹿児島県立奄美図書館でした。